

# 黎明紙第6号御研鑽

## 「生命の科学」の問題点

神様の御目的が病貧争絶無の真善美完たき理想世界の建設におありになることは、已に申上げてきたことあります。

このための、先ず根本条件が『人間生命の解決』にあり、またその『安全確保』（栄103）にあることは、いうまでもありません。私共の祖先は、人間の生命を絶えず脅かしてきた戦争と病気をなくすために、血の滲むような努力をしてまいりました。これらの努力に対して、私共は心より尊敬の念をもたして頂かなければならぬと思います。しかし、残念なことに依然として「生命」の問題は解決されて居りません。それどころか益々問題は複雑にな

り、解決の道から遠ざかりつつあるかの感さえいだかせて  
いるのであります。

明主様は、「病氣」に関する御論文を最も多くお説き下  
さいました。このことが、ややもすると世間から本教が病  
氣治しだけの宗教のような誤解をうけたり、私共自身まで  
がそれらの教えを部分的にしか掴ませていただきかず、ただ  
表面的な自己流の解釈で今迄のあり方を批判したりしてき  
たことが多かったのではないかと思ひます。明主様は、私  
共にとつて一番重要な「生命」の問題に最も密接な関係が  
あるが故に、「病氣」についての御論文を数多く説いて下  
さつたのであると思ひます。これから、「生命」の問題  
が、益々とりあげられねばならない時代に入つてくるわけ  
であります。が、私共はここで明主様の御教えを、もつと根

本から白紙になつて正しく掲ませていただかねばならない  
と思います。

今年の正月のある新聞で、かの物理学者である湯川博士  
が、「七十年代を語る—生命の本質にせまる。」と題して  
次のようなことを述べて居られます。博士の意図されてい  
ることが十分お伝え出来ないかも知れませんが少し要約し  
てみますと、始めに物理学関係の展望について語られたあ  
とで、『七十年代からさらに八十年代とますます発展す  
ると思われるのは、やはり生物関係だろう。（中略）生物  
学はどんどん生命の本質というものにせまつていくわけ  
で、そこで非常に多くの発見があるだろうと思う。しか  
し、それは同時に非常に深刻なむずかしい問題をひき起こ  
すに決まつてゐる。』

「ここで心臓移植を例にあげられ、これが大脳の問題に近づき、人間の知能の働きまでも左右出来るようになり、さらに、品種改良のようなことが人間自身についてまで出来るようになると、問題は深刻になると述べて居られます。かつて、原子爆弾の発見が、それまでの科学者の考えを非常にかえました。科学というものは、人間にとつてすべて善であるということはない。いいこともあれば、非常に恐るべきこともある。ところが、むずかしいのは、あらかじめそれを知ることができないこと」であります。しかし、原子力の平和利用と核兵器の場合は、まだ明白に分けて考えることが出来るわけであります。「ところが、生物とか医学になつてくると非常にむずかしい。毒が薬になり、薬が毒になることがある。これはデリケート（微妙）

な問題で、例えばDDTは戦後日本でもまいて、伝染病の予防などに大いに助けになった。確かにプラスになったが、二十年たつた今日、アメリカでは人体に悪いから禁止しようということになった。これはむずかしい問題で、二十年前にそれを予測できたかどうかということもあるし、しかし初期にはプラスであり、長く見るとマイナスの方が多いということだ。DDTは一例に過ぎないのであって、こういう問題がたくさんある。（中略）科学というものはまだまだ進歩するだろう。どういう方面でも非常に基本的な問題があつて。その進歩というのは人間にとつて非常に大きな意味があり、価値があるということがいろいろある。それはあるけれども、それ同時に科学の進歩から出てくるいろいろな危険なことがたくさんあるので、これに対

してできるだけ早く気がついて、できるだけ神経質になつて、できるだけ早く手を打つということが、七十年代になると、今までよりずっと重要問題になつてくる。これはつまり、寿命や運命に関することなのだから、きわめて重要な問題だ。（中略）

科学者の中にもこういう心配をしている人もいるだろうが、一般の人は「科学は万能だ」と考えやすいので、科学の中から現れてくる可能性の中に、いろいろ困ることがあるということを、まず専門家が気づかなければいけない。

ただ『人間』というものはヘタな碁打ちのようなもので、二、三手先までは読めるが、ずっと先までは読めない。だから DDT のようなことになる。どんな人だつてずっと先まで読みきれない。ことに碁と違うのは、碁は相手によつて違

つてくるが、われわれは自然界という世界の中に生きていてその世界の中に未知なものがあつて、それを探究している。

だから、暮でいえば人間の相手の世界は数十段、百段と、ものすごく比較にならない相手だ。したがつて、こち  
らがいくら手を読んでみても、なかなか読めないわけだ  
が、できるだけ先まで読んでみることだ。百年先、二百年  
先のことまではわからぬが、せめて十年。二十年でひど  
いことにならぬよう努めしなければならない。といふ  
ことは、これからいろいろなことの進歩や変化のテンポが  
早くなるので、これからが非常に大事だと思う。まだまだ  
と思つてゐるうちに、たちまちそういうことになつてくる  
ので、心配し過ぎるぐらいでちょうどいい。（中略）十九

世紀の終りに放射能が発見され、エックス線も発見され  
て、研究が盛んに行なわれたが、人間にとつて放射能がど  
ういう恐しいことがあるのかということは、なかなか突き  
止められなかつた。（中略）そういう意味で、七十年代の  
科学といふものは明暗両面があつて、むしろ暗い方が、い  
ままでのようく知らずにいたのでなくどんどんハツキリし  
ていく。

とにかく、このように科学といふものはどの方面であつ  
ても、もろ刃の剣であるという認識をもつと深めて、でき  
るだけ読みきるようにして、できるだけ早く手を打つといふ  
ことだ。

科学の成長を一本の木が成長していくのに例えていう  
と、根があつて根が張つていかないとならない。それと同

時に、いろいろ枝葉が出てくる。しかし、悪い枝はどんどん切つていかないといけない。良い面を育てて、悪い枝を切る。根を張ると同時に、悪い枝を切つて、良い芽を育てるということである。

宗教というものは、初めに絶対の真理というものを体得することだ。しかし、科学というものは何かわけのわからぬところがあつて、未知なものがあるから、それで探究をつづけるということだ。

こういうふうに見ると非常に違つたものだが、ただ違つてているというものではなく、科学自身が人間の幸福になる部分もあるし。ならない部分もある。しかもまた、幸福というものは一体なんであるか。あるいは人間を破滅させるかもしれない。宗教というものは本来救済である。人間一

人一人を、また人類全体を救済するといわれる。このように、世界宗教といわれるものは、みな人類の救済ということがある。

宗教は人間の救済の仕方であり。科学は人間の生活を良くするということとは大分違うけれども、やはり人類をなんらかの意味で救済し、幸福にすることに貢献しないといけない。

ところが、科学の進歩は新しい危険を生み出してくる。だから前にいったように、早く悪い枝を切つてしまふことだ。

何が救済であり、何が幸福であるかということはむづかしいが、やはりもつと真剣に取組まなければならない。したがつて、科学と宗教とは違うが、宗教と共通するところ

がある。（後略）（科学新聞45・1・1）ここで、湯川博士はいくつかの重要な問題を示して下さつて居ります。これから、「生命」に関する研究が、科学者の人々によつて益々進められていくあります。そこには今までの科学の研究の時にはなかつた根本的な問題がよこたわつてゐるわけであります。殺虫剤・DDTの例で示されましたように、最初人間の幸福のためになされたことが、二十年たつた今日、人間を破滅させる方向への働きがあることが分つてきて居ります。しかし、このようなことになるのを、人間の智慧で見通すのが非常にむづかしいところに大きな問題がひそんでいるわけであります。

農業にあらわれた行詰まり 先日（十月二十日）、農林省では、稻作にBHC、DDT、ドリン剤を全面使用禁止

することに決めました。これは、「病害虫への効果に開発の重点がおかれたため、食品や動植物への残留毒性の研究が遅れていた」（朝日・45・10・21）のが、最近になつて「野菜や牛乳から農薬が原因とみられる有毒物質が検出されたり、農薬に対する害虫の抵抗力が強まつてきた」（朝日・45・10・13）ことが分つてきましたからであります。三十年以降の農業の目がましい進歩、またそのために費やされた多くの人々の努力を忘れてはならないと思します。しかし現実は、「農薬の過剰散布で害虫の抵抗性が強くなり、それを退治するためにはさらに毒性の強い農薬を使わねば手におえない」ことになり、遂には「こんご大量発生が起きたときには防除のしようがない」（朝日・45・10・13）ところにまで追いつめられつ

つあります。一方、これら農薬が一度土壌中にまかれたら数年間は残留し、農作物に吸収され続けることも分つてまいりました。また、それらを摂取することによつて、成人の腹部脂肪に農薬が蓄積されたり、（朝日・45・10・23）血清中にも残留していることが発表されて居ります。（朝日・45・0・25）更に、私共のみならずそれらの農薬が、次の世代へ母乳を通して伝わつていくとも言われて居ります。（読売・45・10・17）ここに「農業そのもののあり方が根底からゆきぶりかけられ、「こうした八方ふさがりの農業を建て直すには「基本に帰る」以外に打開策はない、という意識が、ようやく農業関係者の間にも強まってきた。大量の農薬使用を前提にした農業技術や経営方法を反省し、行きすぎを是正していこうとい

う考え方だ。いまのようになんかに頼れなかつた時代の農業の基本は、植物を健康に育てることだつた。」「むかしながらの栽培方法に戻すのはムリとしても、できるところから少しづつでも本来の農業のあり方に立ち戻ろうというわけだ。」「肥料を控え目にした方が、かえつてコメの質はよくなるし、果実の糖度もふえる。」「いぜんとして三十年代以来の生産第一主義に貫かれた農業のあり方がいまきびしく問い合わせられ、根本的な転換を迫られている」

(朝日・45・10・13) のであります。農薬を考え出し、研究し、それを生産し使用してきた人々は、人間の幸福のために数限りない努力をしてこられたわけでありますが、何十年か経た現在になつてから、結果的に人類を滅ぼしかね

ない状態に近づきつつあることが分ってきたところにこの問題の深刻さがあると思います。

### 最近の医学の状況

これが、私共の食物の問題から一歩進んで、直接「生命」に関する医学の問題となりますと、事柄は一層深刻さを増してまいります。最近の新聞紙上で、松田医博は次のように述べて居られます。

「つぎつぎとでてくる新薬を医者は注射するが、そういう今まで使つたことのない薬の副作用がでてくるのは十五年も十五年もたつてからだ。何だかわけのわからぬ病気がふえたといつて学会でさわぎだし、やれウイルスだ、農薬のせいだなどと何年も討論し、結局、新薬のせいだとわかつたときは、病人は再起がむずかしいということでは、浮

かばれない。しかも、新薬をだれがあたえたかもつかめないことが多い。何人もかかった医者のうちどの医者がのませたかも追求できない。注射ばかりでない。食品にもいろんな薬が着色、加工、味つけ、防腐に使われていて知らぬまに体内に蓄積している。その上、必要もないのに、新薬を注射されては、からだの中は薬ヘドロでいっぱいになる。こういうことがわかりていてどうにもならぬ。二十世紀後半は、人間自身が作りあげた巨大なロボット、文明が人間の主体性を無視してあばれまわる時代のようだ。医者に向かってからだはこちら持ち！と叫んでもどうにもならぬのかもしれない。」（読売・45・10・13）

先々号（第四号）の「社会レーダー」欄でとりあげていただきましたように、キノホルム（整腸剤）がスモン病の

原因になる疑いがあると言われてより、その後種々の研究・実験がなされて居ります。新聞記事だけより得た知識による素人判断であり、間違ったとり方をしているかも知れませんが、現在の厚生省のスモン調査研究協議会における大勢は「キノホルムを単独の病因とするには、まだ疑問があるが、スモン病を悪化させる因子であることは、間違いない」（読売・45・11・14）という結論のようであります。これまでの約一か月間には、キノホルムが「すぐ発病原因とは結びつかない」（朝日・45・1・11）という報告もありますが、岡山大の堤助教授によるスモン病で亡くなつた二十三人の方の解剖結果では、キノホルムの投与量が増加するにしたがい神経病変の範囲が広がつているとさきわめて興味ある発表がなされて居

ります。（読売・45・10・25）豊倉東大教授によるキノホルムをウサギに静脈注射して神経障害を確かめた研究など、昨年来有力であつたウイルス説は一步後退しているようあります。（朝日・45・11・8）

### 薬剤療法への反省

先月（十月）下旬に大阪で開かれた日本がん治療学会、及び日本がん学会に於ける傾向がある新聞（朝日・45・10・16）に出て居りました。その記事によりますと、「がん征圧の武器として、ここ十数年、次々と登場した制がん剤について、最近、研究者、臨床医の間に「根本的な再検討が必要だ」との声が高まりはじめた。局部的にがんを押えることができても、かえつて新しいがんを誘発したり転移を促進したりする可能性が強い、というのだ。副作用

用による死亡例もあると指摘する研究者さえある。（中略）化学療法部門などに副作用や乱用の危険を警告する研究発表が多く、制がん剤療法が反省期にはいつたことを、はつきりと示している。「ようであります。「がんそのものの実体が解明されていないのだから、制がん剤がどのような仕組みで効き目を発揮するかもまだ十分わかつていない」わけでありますから、「プレオマイシン（制がん剤）の臨床使用例がふえるにつれて肺線維症など予期しなかつた副作用」なども当然生み出されてまいります。「制がん剤が開発された当初は、発熱、食欲減退、脱毛、注射時の激痛など「がんがなれるならやむをえない」とされる副作用の報告がほとんど」であつたのが、制がん剤によつてかえつて「がんを誘発するのではないかという見方が有力に

なってきた」わけであります。阪大のある臨床医は「制がん剤できれいに全快した患者ほど、後が心配だ。二、三年たつと急に再発し、再発した場合は手がつけられないケースが多い。使用されている制がん剤を根本的に検討しなおす時期ではないか」といつて居られますし、プレオマイシンの発見者である梅沢博士も、「副作用のない制がん剤はこれまでひとつもできていない。これからもできる可能性は少ないだろう。またすべてのがんに共通して効果のある制がん剤というものもない。それだけに、臨床使用上、十分な注意が必要なことはもちろんだ。少なくとも、どの制がん剤がきくか、はつきりしないがんの治療に、むやみに使うことはひかえた方がよい、と私も思う」と述べて居られます。

制がん剤のように、比較的最近に用い始められてきたものだけではなく、私共素人から見れば当然すべてが自明のことになつてゐると思つてきた種痘についてさえも、本年六月頃より大きく問題としてとりあげられていることは、御承知の通りであります。しかも、これらは日本だけではなく近年米国に於いても、非常にとりあげられてきて居ります。

一九六二年（昭三七年）以来、米国の厚生教育省食品医薬品局（F D A）が中心になつて、すでに許可された医薬品の科学的再検討を三六〇〇項目にわたつて行つてゐるようであります。その結果糖尿病の治療薬として広く使われているトルブタマイドが治療に全く効果がないばかりか、

有害の疑いが出てきたために検討にのりだすとも言われて居ります。 (科学・45・8)

先日、ボストンの医師ジック博士が、ワシントンでの薬物の逆作用に関する第一回国際会議で報告した統計によりますと、病院で調剤された薬の二十のうち一は逆作用をおこす可能性があり、百のうち一は入院期間を長期化したり、生命を脅かす危険があるということであります。この調査は、一九六六年（昭四一年）以来十一の病院の協力のもとに実施され、モニター制を採用し、その結果をコンピューターによつて処理されて居ります。今日までに、八〇〇〇名の患者と一二〇〇種の薬品の種々な反応についてのデータが含まれて居り、一人の医師では気付かないような薬の逆作用や、それと薬との関連をいち早く見出すことが

出来ることであります。例えば、静脈注射によつて利尿剤が投与されると腸内出血を起す可能性があるということが、一〇五の事例について迅速な照合をした結果、この併発症が四人に一人おこるという結論に達して居ります。

なお、ジック博士は、これらの調査が全国的機関で行なわれるよう提唱して居るわけであります（ニューズーウィー

ク45・11・2）

以上、人間の生命を救うために、長年多くの人々によつて研究され、作り出された薬剤が、ある期間を経たのちマイナス面が段々分つて来たことの実例をいくつか申し上げたわけであります。主として最近の一般的新聞記事を、素人判断で抜粋しましたので、個々のことでは誤つたとり方

をしているかも知れませんが、その点は御了承いただきたいと思います。

### 医学のもつ根本問題

専門家の方々は詳しく知つて居られるわけであります  
が、これら薬剤についてだけでなく、過去の医学的知識や  
治療法の中で、何年かたつてから誤まりが分つてきている  
ものも多くあるのではないかと思います。例えば、過去に  
その働きが不明であり、無駄なものとさえ言われていた盲  
腸（虫垂）のもつ重要な役割が分つてきたり（科学44・  
11）、内科・外科を問わず各領域で多大の成果をおさめ  
た輸液療法にも数々の反省がなされているようあります。  
（日本医事新報45・11・7）

かつて、全盛をきわめた薬剤や治療法が、何年かたつた後、用いられなくなつた例はたくさんあると思います。そこに医学の進歩を見出すことが出来るのであり、多くの方々の絶えざる努力によつて、よりすぐれた薬剤や治療法が発見された結果に外ならないわけでありますから、私共にとつては大いに感謝し喜ぶべきことでありましよう。しかし、その中には致命的なマイナス面が分つたために、用いられなくなつたものもあると思います。医学の進歩・多くの方々の努力によつて、マイナス面が分つてくることもあるわけでありますから、そのこと自体は当然なればならないことであり、喜ぶべきことであります。しかし、その陰には、犠牲になつた多くの人々があるのを忘れてはならないと思います。ものごとの進歩には、失敗と犠牲はつ

きものかも知れませんが、こと生命に関する分野においては、軽々しく論じてはならないと思います。

最近、時々言われている、いわゆる非良心的な治療、経営主体の治療、若しくは、現在の時点に於ける医学の立場から見て明らかに知識不足による失敗、或は技術上の失敗による不幸な結果についても真剣にとりくむべき問題であることは勿論であります。これらはむしろ医学を専門とされている方々の間での問題であり、私共が立ち入るべきことではないと思います。

私共は、ここでは、現在の医学に於ける最高の知識と技術を駆使して、誰が見ても最善の方法であり、最も良心的な医師によって行なわれた治療をもつてしても、将来マイ

ナスの面が分つてくる可能性があるという本質的な問題を考えてみなければならぬと思ひます。

この度、文化勲章をうけられた沖中博士が定年講義の中で、在職十七年間の沖中内科教室における記録確実な剖検例七五〇例を検討された結果。一四・二%の誤診率であつたことを発表されたことがあります。この講義の中にみなぎつて居ります患者に対する博士の絶えざる真摯な御態度には強く感銘をうけさせていただくと共に、私自身の御神業にお使いいただいて居りますときのあり方を深く反省させられるわけであります。

その時点での人事をつくした以上、多少の誤まりや犠牲は人間として許さるべきであり、仕方がないという考え方はむしろ当然と言うべきであります。今、目前の危機を救

うために、将来のマイナス面は考えて居れないということもありましょう。しかし、この事が生命の問題であり、しかも、人類の将来の存亡にかかるかも知れぬ問題である限り、いつまでもこのままにしておいてよいことではないと思います。

もし、これが科学の本質、唯物科学の基礎の上にたつ医学の本質からくる問題であるとするならば、私共はこれらについて真剣に考え、とりくまなければならないと思います。昔の呪術や迷信をなくし、人類を病気より救い、生命の問題の解決に着々と成果をあげつつあると思われてきた科学、医学の根本的なあり方を、私共は今一度考えてみる必要があると思います。

## 御教えこそ唯一の指針

湯川博士が言つて居られましたように、私共人間には中々先のことを見通すことが出来ません。しかし、生命の問題となりますとそれでは許されないことが出てくるわけであります。そこに博士の言われる「初めに絶対の真理と いうものを体得する」宗教の役割が重要になつてくると思 います。しかし、それも明主様がお説きになつて居られま すように 『宗教と科学とを別々のものとして扱つてき た』 今日までの考え方であつてはならないことは勿論であ ります。また、今までの多くの宗教のように『信仰一点張 りの独善的のもの』 でも『神秘幽幻な説き方』 であつても この問題の解決は困難であります。ここに『実際を裏

付とした理論』であつて而も　　『人智によつて生れた学問上の研究理論ではなく、神の啓示を土台とし、実験によつて得たる真理』を説かれた御教えによつてはじめてこの問題解決が可能なわけあります。

『宗教とか科学とかに偏しないのは勿論、前人未見の宇宙の深奥なる実体にまで突き進んで説くのであるから、一言にしていえば真理そのものの解明である』とお説きいただいて居ります。（黎明2号）

明主様の御教えによつて、私共は神様によつて示された人間の今後進むべき正しい方向をお説きいただいているわけであります。

明主様の御出顕、またその説かれた御教えこそ、私共を一人でも多く救わんとされる神様の大愛の発露であり、唯一の救いの綱であります。

今後、多くの人々の努力により、科学をはじめあらゆる分野での進歩は目覚ましいことでありましょう。その時こそ、夫々の分野の人々が、御神書を通じて絶対の真理を覚られ。その人達の努力が真に人間の幸福の方に向へむかって生かされていかなければならぬと想います。ここに、私共は明主様の御教えに基づく信仰の確立を目指して努力させていただき、御教えを正しく世の中の人々にお伝えさせていただかねばならないと想います。